

ゆりこ

大村伸一

ゆりこはますます魅力的になっていた。テーブルの向側で少しうつむきながらゆりこは何を考えているのだ。僕の前のコーヒーカップにコーヒーはもうない。ゆりこはオレンジジュースを口に運んでそのカップ越しに少し僕を見る。まるでなにかを尋ねかけているかのように少し上目使いで。その仕草が自分をかわいらしく見せることを意識的にではないにしろゆりこは知っている。以前にもこんなことがあったような気がするがそんなことはなかったのだ。「以前いっしょにここへ来たことなかったよね」ゆりこは急に問いかけられてそれが何を意味するのか咄嗟にはわからなかったようだ。ちょっと間を置いてうなづくと「ええ。以前はいっしょに二人きりでどこかへいったことさえなかったわ」という意味の答えを返した。「ええ。二人きりで行ったところなんてありませんでした」と言ったのかもしれない。

ゆりこは白いブラウスにハコヒダの入った黒いスカートを着ている。ゆりこの後ろの壁は白く塗装されていてゆりこの首と手首が二つ空中に浮かんでいるように見えるかもしれない。髪は少しだけ長くしている。首の横に垂れている髪はカールしていて以前にはなかったことだ。「それはいつ頃」「一年と半年くらい前なんです」わたし他に芸がないから髪型だけはよく変えるんですと以前言っていたのにどうして「そんなに長く」変えなかったのだ。「」瞳が何かを語っている。それが何なのか今ならきつと「わかる」だろう。「本当にわかります」急に瞳が変わってしまった。そこにあったものが今は隠されて「わからない」「どっちなんですか」少し微笑んでいるのはさらにごまかしを重ねるためだろう。ゆりこには僕の答えなど「どっちでもいい」のだ。その考えは胸の中に重く残った。「出ようか」「」うなづいた時またあの瞳が戻って来ていたような気がした。だがゆりこはレシートをとりながら「今日わたし」と言うなりレジの方へ歩き始めた。僕は不意にコーヒーの味を口の中に感じた。今日は以前と同じ様にブラックで飲んだのだった。

店を出て少し歩くとゆりこは急に傘を忘れたと言って戻って行った。店の黒いガラスのドアを押して中に消えたゆりこはもう永遠に戻ってこないのではないか。そう思ったことは以前にもあった。しかしその時の印象は間違っていた。なぜなら三年という月日が愛や恋にとってほとんど永遠にも等しい時間であるにしろ今日こうして僕の傍に居るのはゆりこなのだ。しかも突然会いたいと連絡してきたのはゆりこの方なのだ。

そして今の印象も間違っていた。店から戻ってきたゆりこはちょっと舌をだし

て「あいかわらずおっちょこちょいなんです」と言った。だが以前からそんなゆりこの姿を直接目にしたことのない僕にはその言葉はやや現実味を欠いている。

「傘あった」と聞いたがそれはゆりこの右手を見ればわかることだ。左手には使い馴れているらしい小さなハンドバッグがある。傘は濡れていてゆりこの手も滴にぬれていた「うん」ゆりこは少し傘を持ち上げてみせた。

いったい雨はいつ降ったのだろう。今日はずっと会社の中にして「外へ出なかったんだ」だからすこしも雨が降ったなんて「気付かなかった」「なに」「雨」「ひどかったんですよ」「いつ」「来る前ちょうど家を出るとザーッと降ってきたんです。あわてて傘を取に帰ったのに電車に乗っている間に晴れちゃったんですよ。いやな」雨だったのか。「雨だったんです」

確かに道は雨で新しい黒い表面をみせているし舗道のくぼみにはいくつも水溜ができています。靴はたくみに水溜をよけてくれるので足元に注意しなくても歩けた。ゆりこはますます魅力的になっていた。僕の横にならんで歩きながらゆりこは何を考えているのだろう。

「どこへいく」と聞いたのだがゆりこがそれに明確に答えられる筈のないことも分かっていた。二人とも虹にむかって歩いていて表情を覗き込むわけにもいかなかったがゆりこが何か別のことを考えているのは確かだ。「どこへいきます」これは疑問文で僕の質問の反復に過ぎない。そう答えながらこっちを向いたゆりこは微笑を浮かべていてまるで僕を試すかのようだった。

それでも僕たちは歩き続けた。虹の下を黒く小さく見える鳥が飛んでいった。僕はそれを見ていた。何か話し始めるはずだ。ゆりこは今訪れたこの何もない時間に今日僕を呼び出した理由こそを話し始めるべきだ。物語とはそういうものだしこの空白の時間には特に何か決定的な言葉こそふさわしい。だがゆりこは俯きがちに歩きながら何も話し始めない。決定的な言葉を話し始めるのはいつも僕の方なのだ。そしてそれからゆりこは話す。取り返しのつかない僕の言葉をそれが取り返しのつかないものなのだと僕に教えるために。

道は市の南側を通っていて郵便局小学校公園橋そしてまた郵便局の前を僕たちは歩いて行った。「手紙」をゆりこはどうしただろう。以前は何通も何通も何通も何通も何通もゆりこに手紙を書いたものだった。そのうち半分くらいは出さないままになったがそれでも五六十通はあった筈だ。どうしてあんなに書くことがあったのだろう。自分の事ばかり書いて。

「手紙」「たくさん書いたけれど」あれ以来一通も書いていない。「みんなとってありますよ。リボンかけて」うれしそうに微笑む。自分の手紙の話をするのは自分の話をするようで嫌だった。「ところで小説はどうですか」小説なんてあ

れ以来「書いていない」これも自分の話だ。「残念ですね」「何故」「」答えられるわけがない。「ごめん」

目の前で道はとぎれていた。「いつでもこうだ」った。どの道も歩き詰めれば途切れてしまう。ゆりこもそんな道の一つだった。「いつでも」疑問文反復。

「さっきの公園へ行こう。他になければ」「」ゆりこはうなづいて方向をかえた僕にあわせて方向をかえた。今来た道がそこにあった。

少しだけ風が吹いていた。ゆりこの髪がなびいて甘い匂いがした。公園にはおそらく杉だとかポプラだとかいう僕にはそれに少しも確信のない名前を持った植物が三メートルおきくらいの間隔で植えられていた。「かわいい」二人の子供が砂場で遊んでいた。

石のベンチに並んで腰掛けると目に入るのは赤くふくらんだ夕日だけだった。何もかもが赤色に変わっていた。太陽からゆりこにいたるすべてのものが赤く変色していた。「突然」何もかもが。「突然お電話して驚きました」驚いたのはこの言葉の方だ。初めてゆりこは自分の方から話し始めたのだ。それは何も変えない言葉でしかない。僕は無意識の期待を押さえそう思おうとしつつゆりこを見た。ゆりこは目を合わせないようにうつむいていて僕はそっと目をそらせてみせる。

「あれから三年もたったのに突然お電話してごめんなさい。でもすぐに会って下さってうれしかったです。それにちっとも変わっていないくて」それはゆりこも同じだった。そしてその言葉に続く言葉こそ今日ゆりこが僕に会いに来た目的だということは分かっていた。そしてその言葉が考えられる二つの可能性のうちどちらかということも分かっていた。だがいまさらゆりこの心が変わるはずもなかったし僕は何一つ期待してはならないそれはなにも変えはしないのだ。

「結婚するの」それ以外には考えられない。「」おめでとうと言うべきなのだろうがそんなことを言う習慣もなくそういった言葉をただ気恥ずかしいと感じてしまう僕には何も言えない。「ちがいます」ならいったい。期待してはいけない。まるでばかげている。三年もたったのに。

「わたしもう結婚しているんです」「」「この間Aさんに会いました。それで聞いたんです。あの方とお別れになったんですって。婚約までなされたって聞きました。わたしには関係のないことかも知れない。こう考えるのはわたしの思い上がりかもしれないけど。わたしのせいですか。そうじゃないとも思います。だってあんまりです。そんなことって。ただ」それだけの事を言うため。「」笑い出せばいいのだ。まるで見当違いだとでも言うように笑いそうじゃないよと言えればいいのだ「そうじゃない。いったいAから何を聞いたんです。そうじゃない。うん。それよりいつ結婚したの。どんな人」声がすこしうわずってるな。「去年

の春に」

それから僕はことさら陽気にしゃべりまくった。それがまた逆に自分の本心をさらけ出すことになると思いながら。しかしその後のことはあまりよく覚えていない。

話し尽くすと気詰まりな気分になってどちらからともなく歩き始めた。駅に着いていた。帰りの電車はすぐくる。僕は駅前でさよならと言った。ゆりこはさよならと言って駅の中へ消えた。

ゆりこを駅まで送った後真っ直家へ帰った。夕食を食べ一時間ばかりテレビを見そして床に就いた。本当ならこんな時は酒を飲むのだろうな。そして何もかも忘れようとするのだろうな。そう思い続けていた。眠りながらゆりこの薬指に金色の指輪が光っていたことを思い出してどうしてそれに気が付かなかったのだろうかと思い明日が日曜であることを思い出して月曜は振り替え休日で二日間の連休になることを思い出して会社の仕事を水曜までにかたづけなければならないことを思い出してそれができなかったときの課長の顔を想像しゆりこが燈のついた家へ入って行く姿を想像しまたそれが以前のゆりこ